モノグラフ
中学生の世界
vol. 51

中学生は変わったのか

～1983年との比較～

目次

要　約 …… 2
プロローグ　比較するということ …… 4
第１章　調査テーマの設定 …… 6
　１．10数年前との比較 …… 6
　２．1983年の頃 …… 7
第２章　学校の中の子どもたち …… 8
　１．授業の理解 …… 8
　２．学校の心理空間 …… 11
第３章　家庭の中の子どもたち …… 13
　１．親との関係 …… 13
　２．親を超える …… 17
第４章　規範感覚の崩れ …… 22
　１．善悪のけじめ …… 22
　２．校則への評価 …… 27
第５章　性差についての変化 …… 31
　１．将来の家庭生活 …… 31
　２．女性の役割について …… 36
第６章　社会的な達成をめぐって …… 39
　１．将来への見通し …… 39
　２．将来の仕事 …… 44
第７章　まとめに代えて …… 46
資料１　調査票見本 …… 48
資料２　基礎集計表 …… 61

※おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

『モノグラフ・中学生の世界』Vol.51

調査レポート

中学生は変わったのか

―― 1983年との比較 ――

深谷昌志（静岡大学教授）

要約

●目的＝中学生の意識が変わってきたのか。それを明らかにするために、1983年前後に実施した調査の項目を利用して、1995年に調査を実施し、両者の比較を試みた。

①　授業の理解

授業が3割くらいしかわからない生徒はほぼ3割で、この傾向は1983年と1995年とであまり変わっていない。（p.10 表3）

②　心の通い合い

仲よしの友だちはともかく、同級の友だちや担任の先生などへの心の通い合いは低下している。（p.12 表4）

③　親との関係

親と仲のよい中学生が多い。その中で1983年の中学3年生は、親離れの傾向が認められた。しかし、1995年の中学3年生は親に依存する傾向が著しい。（p.14 表6、p.15 図2）

④　親を超えたか

親を超えられないと思っている生徒は1995年の方が多い。特に中3がそう思っている。（p.19 表9、p.21 図3）

⑤　規範感覚

「放置してある他人の自転車に乗る」などを悪いと思う割合が低下している。（p.24 表11）

⑥　校則についての評価

校則の多くについて、無意味だから守る必要がないと思う生徒が増加している。（p.28 図5、p.29 表13）

⑦　将来の家庭

女子の間に夫にも家事・育児を担ってほしいという意識が強い。男子も家事に協力しようとしている。（p.33 図6、p.35 表18）

⑧　性的な役割

1983年に比べ、1995年の生徒は、性的な役割を解消しようと思っている生徒が多い。（p.36 図7、p.37 表19）

⑨　社会的な達成

がんばっても、とてもなれそうもないと社会的な達成を断念している生徒が増加している。（p.41 表22、p.42 図8）

⑩　将来の仕事

責任のない、人と一緒にする仕事につきたいと願う生徒が増加している。（p.44 図9、p.45 表24）

〔まとめ〕

データによると、10年の間に中学生が変わっているのは確かだった。そうした変化を要約してみると、①気にかける友だちの数が減り、心理的な空間が狭くなった。②善悪についての規範感覚が崩れ、悪いと思うことが減少している。③将来の家庭では夫と妻とで家事育児を担おうという傾向が強まる。④社会的な達成を断念して、責任のない楽しい仕事をしようという気持ちが強い、の通りとなる。

おおづかみにすると、自分の世界の中で楽しく暮らしたいという気持ちが表面にでている。日本で支配的であった滅私奉公という生き方にも疑問がある。かといって、社会的な達成を視野の外にして、家庭を中心にマイペースの生き方をしたいというのは日本の状況で可能なのであろうか。

〔調査概要〕

対象●神奈川・埼玉・東京の中学1～3年生 1,737人

時期●1995年2月～3月

方法●学校通しによる質問紙調査

サンプル構成　（人）

	男子	女子	計
中1	260	252	512
中2	308	286	594
中3	280	351	631
計	848	889	1,737

プロローグ

比較するということ

環境の変化の大きさ

現在に身を置いていると、現在をめぐる状況がずっと昔からあったように思いがちになる。それでも、おとなたちは過去との連続の中から現在をとらえるので、現在の影響を受けることがそれほど多くはない。

しかし、それは意識化して問題をとらえた場合で、ぼんやりしていると、変化を感じにくい。確かに筆者の身の回りをその気になって見渡してみると、いつのまにか鉛筆と原稿用紙、速達などとの縁が切れ、パソコンを使って文章を打ち、ファックスで原稿を送り、パソコン通信を利用して校正に目を通す生活を送っている。それに、禁煙をした10年以上前からガムをかむことが多いし、この文章もジーンズにTシャツというスタイルで打っている。一昔前には考えられなかった生活である。

そうしたおとなに対し、子どもたちは現在にしか生きていない。したがって、現在がすべてとなる。子ども部屋の回りを見渡してみよう。テレビにテレビゲーム、ラジカセにマンガ雑誌などがところせましと置いてある。現在の子どもたちにとって当たり前の光景だが、おとなたちの子ども時代を思い起こすと考えられないくらいの豊かな状況である。

子どもたちが変わったといわれる。しかし変わったのは子どもなのではなく、子どもをとりまく環境のように思われる。したがって仮に子どもが変わったとするなら、それは環境の変化を受けて、子どもの生活が変わった側面が大きいのであろう。

子どもの立場で考えたとき、環境の変化はさまざまな側面に現れるが、そのひとつがメディアの変貌であろう。具体的には電子メディア時代の到来で、時期的には、ファミコンのスーパーマリオが普及した昭和60年末頃になる。それまで、土曜の夜8時になると、どこの子どもたちもテレビの前に集まって「8時だよ！全員集合」を見ていたのに、スーパーマリオは遊んでみたいときにいつでも遊べるのに加え、裏技などにチャレンジす

ると自分なりに楽しく遊べる性格を持つ。そうした意味で、電子時代のメディアはテレビメディア時代の同時性やワンウエイを脱して、利用したいときに個人単位にいつでも利用できる特性を備えたものなのであろう。

メディアに着目して、子どもとの関連を探ると、子どもたちは昭和37年頃からテレビ時代に身を置いていることがわかる。テレビの受信契約台数が1千万台に達し、ほぼ半数の世帯にテレビが普及した頃で、その翌年の昭和38年に、国産初のテレビアニメの「鉄腕アトム」、続いて「鉄人28号」の放映が始まっている。したがって、昭和37年前後に生まれた子はテレビのある環境の中で生まれ、テレビを子守歌代わりに育った感じになる。そして、そうした育ち方をした子は30歳を超えている。

考え方によれば、昭和26年に生まれた子も、大正、そして明治の子も、身近にテレビがないという意味では、育ち方は共通しているといえよう。試みに、現代の子どもの周辺からテレビやその他のメカがなくなった状況を考えてみよう。家にいても遊ぶものがなく退屈だ。それならば、外へ行って誰かと遊ぼうということになり、外遊びをする子が増加するのではないか。

テレビ以前の子どもたちの生活を象徴するのは群れ遊びであった。そうした群れ遊びに共通するのは、①屋外に、②何人かの子が集まり、③体を動かしながら、④これといった玩具を使わずに、⑤みんなでルールを作りながら、⑥自発的に遊ぶ姿だった。換言するなら、テレビ、そうして電子メディアの到来につれ、子どもたちの遊びのスタイルが変化していく。

意識面での変化

子どもをとりまくそうした変化は、子どもたちのものの見方や考え方に影響を及ぼす。テレビの普及により、遊びが「孤立化」したのは確かだが、それでもテレビが一家に1台の頃は家庭の中で人との接触があった。しかし、現在はテレビがパーソナル化して、まったく1人で自分だけの時を過ごせる。

それと同時に、ビデオやテレビゲームがテレビに連動するので、テレビを見た後でテレビゲームをする。そして、ラジカセでCDを聴き、さらにマンガを読むというように、メディアの梯子をしながら時を過ごすという感じである。文字どおり、子どもの間に1人きりで時を過ごす生活のスタイルが定着する。そして、1人でいることが当たり前の感覚が育ってくる。その結果、人に対する感じ方や自己像が変化してくる。

もちろん、子どもたちはテレビの合い間に学習塾通いなどをして勉強に打ち込むので、そうした子どもは物知りな上に静かに時を過ごす素直なよい子でもある。したがって、友を持つことなく、体も使わず、やる気に乏しく、受け身の形で成長する子どもたちが増加しやすい。

本来、外で元気に友と遊ぶのが子どもらしさであろう。したがって、子どもたちの現在を子どもらしさの喪失と要約できるのかもしれない。マルチ・メディア化の傾向は避けられないと思うが、そうした中で、子どもたちの自然の育ちをいかに保証していくのかが大事になる。

そう考えていくと、環境の変化が意識に影響を与え、子どもたちのものの見方が変わっていく。しかし、現在の意識は流れのまっただ中にいるので、変化の方向をつかみにくい。それだけに、何年かした後でああいう考え方はその時代の産物だと振り返る形をとりやすい。そうした意味では、子どもたちの意識の変化は10年とかもう少し時間差をつけ、一昔前と比較してみるとわかりやすいように思う。

幸い、本モノグラフは10数年前に発刊され、データも残っている。そこで10年以上前と比較すると、現在の子どもたちがどう変化しているのか、時系列を追う形で、中学生の意識の変化をとらえようとしたのが本報告書である。

第１章 調査テーマの設定

１．10数年前との比較

中学生が変わってきたという声を聞くことが多い。例えば学校の関係者は、生徒たちが素直で聞き分けがよいのはよいが、幼い感じがするという。また、臨床心理の専門家は無気力型の逸脱が増加してきたと指摘し、さらに野外教育の活動家は、生徒たちの体力が低下しただけでなく、ひ弱で心もとないという。

中学生が変わってきた感触はするのだが、実際はどうなのか。おとなたちがそう思っているだけで、中学生はそれほど変わっていないのかもしれない。そこで、データを通して変化の方向をおさえると同時に、変化の程度を知りたいと思った。

幸い、この「モノグラフ・中学生の世界」は「学校生活の楽しさに関する考察」を1978年（昭和53年）に発刊以来、毎年３冊の割合で調査研究レポートを発表してきた。したがって、この中から適当な項目を選びだし、これと比較をすれば、10数年前との比較が可能になる。

もっとも、調査項目によっては、現在からみて、項目として優れているとは思えぬもの、その当時では重要であったが現在は有効性を失ったもの、さらに、ある特定のテーマを掘り下げるのには必要だが今回のような一般的な比較には不要なものなどがある。そうした項目を除外して、いくつかの「モノグラフ」の中から、現在の問題意識にも十分通用すると思われる項目を選びだした。

項目を選びだした「モノグラフ」は以下の通りである。

1．職業観＝「中学生の職業観」Vol. 16　1983年９月調査
2．学校観＝「学校文化」Vol. 17　1983

年7月調査

3．善悪の感覚＝「前非行」Vol. 18 1983年11月調査

4．親子関係＝「中学生の親子関係」Vol. 19　1984年6月調査

5．性役割＝「性役割をめぐって」Vol. 21　1985年3月調査

6．規範感覚＝「『規範感覚』の崩れをめぐって」Vol. 24　1986年1月調査

このように調査年次は1983年から1986年にわたっているが、以下の分析では中心となる時期をとって「1983年調査」と名づけておきたい。

2．1983年の頃

比較調査の基準とした1983年を振り返ってみよう。ゴルフファンなら記憶に残っている青木功のハワイアン・オープン優勝が2月13日、テレビドラマの「おしん」が高視聴率をとり、ディズニーランドがオープンしたのが同年4月である。教育的には校内暴力が盛んで、戸塚ヨットスクールの事件が発生したのが同年5月だった。ちなみに、この年に任天堂が「ファミコン」を発売してブームになっている。

念のために、1984年のできごとを調べてみると、三浦和義の「疑惑の銃弾」が「週刊文春」に掲載されたのが1月、「禁煙パイポ」のCMが人気を集めたのが5月、7月はロスのオリンピックなどが記憶に残る。

こう見てくると、1983年前後は、昔というには新しいが、今というには記憶が薄れている。そうしたちょっと前の時期なのであろう。考えてみれば、この時期に中学生だった世代はすでに20代の後半に入り、結婚適齢期にさしかかっている。そうした時期の中学生と現代の中学生がどう変わっているのかを比較検討してみることにしよう。

第２章 学校の中の子どもたち

１．授業の理解

中学生たちはどういう気持ちで学校へ通っているのか。**表１**によれば、「学校へ通う」のが「とても」「かなり」楽しいと答えた割合は1983年が31.7%、1995年は32.3%で、両者はほとんど変化していない。楽しくないことはないが、楽しさは「やや」にとどまるらしい。

残念ながら、学校はそれほど楽しいところではないらしい。そうした中学校での満足感を領域別に確かめると**表２**のようになる。友だちとの関係がうまくいっていると答えている生徒が急増している。

表1　学校の楽しさ――「やや」という程度

(%)

	楽しい			ふつうくらい	楽しくない		
	とても	かなり	やや		やや	あまり	全然
1983年	14.3	17.4	18.7	29.8	6.3	6.2	7.3
1995年	16.7	15.6	24.3	27.9	5.4	5.4	4.7

表2　中学での満足――友だちは満足

(%)

		満足				不満			
		とても	かなり	小計	やや	やや	かなり	とても	小計
先生	83年	7.9	16.7	24.6	36.5	21.5	7.4	10.0	38.9
	95年	9.5	15.7	25.2	37.4	22.0	5.6	9.8	37.4
部活動	83年	14.2	21.0	35.2	30.0	19.4	7.2	8.2	34.8
	95年	12.8	18.3	31.1	33.0	20.4	6.1	9.4	35.9
友だち	83年	15.5	29.2	44.7	36.0	12.6	2.9	3.8	19.3
	95年	36.7	33.9	70.6	22.1	5.0	0.7	1.6	7.3
全体	83年	8.4	19.9	28.3	41.6	19.5	4.5	6.1	30.1
	95年	10.4	28.4	38.8	42.3	12.5	2.9	3.5	18.9

あらためてふれるまでもなく、学校は勉強に行く場所であろう。その勉強がわからないと、学校は居心地のよくない場になる。そこで、学習の理解度を教科別に示すと**表3**のような結果になる。

数学を例にすると、1983年に数学の授業が「7割以上理解できている」生徒は46.4%と過半数を下回った。そして、「ほとんど理解できていない」か「3割くらいしか理解できていない」と答えた生徒が24.6%で、ほぼ4分の1の生徒が授業がわからないという。

その他の教科にしても、国語が「理解できても3割以下」は20.8%、英語は30.3%に達した。そして1995年の調査結果によると、「ほとんど・3割くらいしか理解できていない」割合は数学27.9%（1983年より3.3%増）、国語12.5%（1983年より8.3%減）、英語33.1%（1983年より2.8%増）の通りである。

つまり、教科による不揃いが認められるが少なくとも、1983年より「勉強がわかるようになった」とはいえず、どちらかといえば、わからない度合いが増したような印象を受ける。

表3　授業の理解――半分くらい

（%）

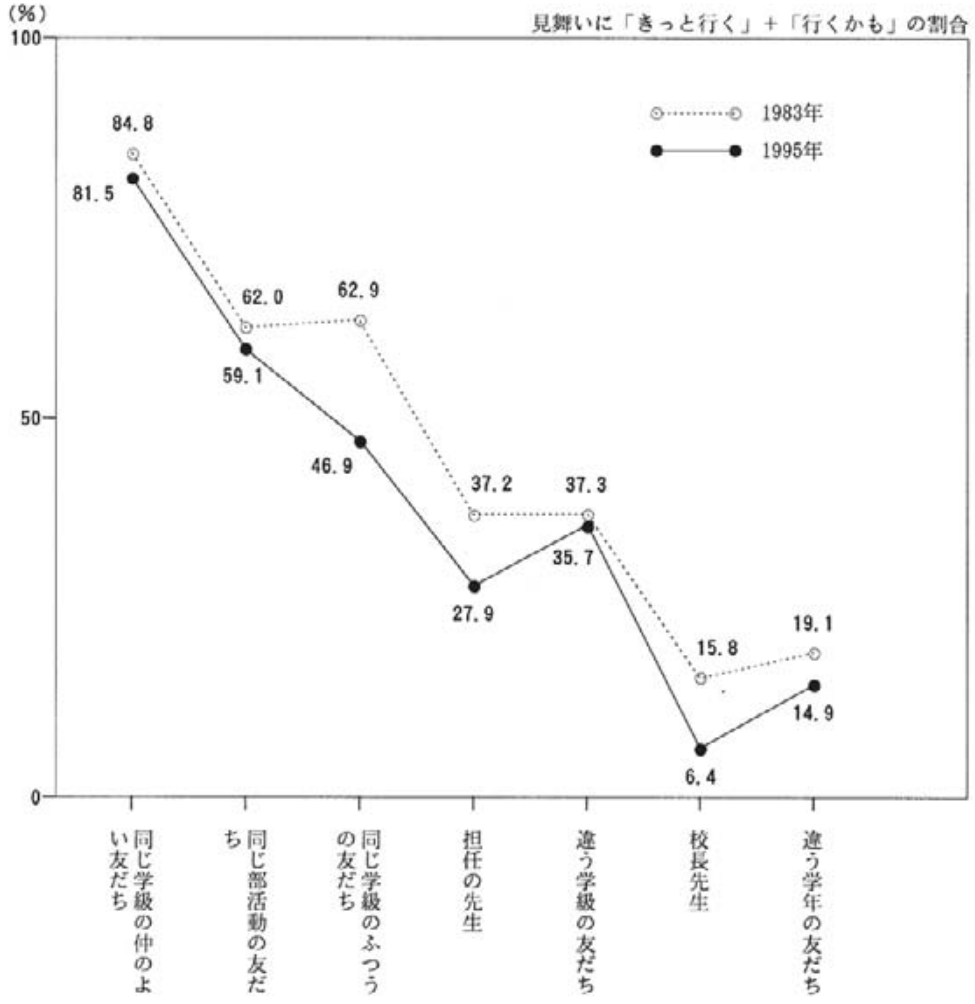
		理解できている					ほとんど理解できていない
		10割	7割	小計	5割	3割	
英語	83年	9.6	31.0	40.6	29.1	18.7	11.6
	95年	9.3	27.5	36.8	30.1	19.1	14.0
数学	83年	11.7	34.7	46.4	29.0	16.1	8.5
	95年	9.5	31.3	40.8	31.3	19.5	8.4
国語	83年	5.4	33.0	38.4	40.8	15.2	5.6
	95年	10.0	43.3	53.3	34.2	9.8	2.7
理科	83年	7.3	29.2	36.5	37.2	19.6	6.7
	95年	7.4	30.9	38.3	37.6	17.6	6.5
社会	83年	7.8	27.1	34.9	34.5	20.9	9.7
	95年	10.3	34.9	45.2	31.7	15.5	7.6

2．学校の心理空間

もちろん、学校は授業だけを狙いとしているものではない。学校の中には、教師や学級の友、部活動の仲間などのさまざまな人々がおり、そうした人との関係に包まれて、学校生活が進んでいく。

そこで、そうした人たちとの心理的な距離を「その人が入院したのを聞いたら、見舞いに行くか」の形で設問してみた。結果は**図1**（**表4**）からも明らかだが、1983年と比べ、1995年では見舞いに行く割合がかなり減少し

図1　心の通い合い



ている。同級の仲よしや同じ部活動の友だちはともあれ、同じクラスのそれほど親しくないふつうの友だちや担任の先生を見舞うという生徒は1～2割減少している。

こうした設問に「行くかもしれない」と答えた生徒が、実際にそういう状況になったとき、見舞いに行く可能性が多いとは思われない。そうだとすると、生徒たちは同じクラスの親しい友だちか、同じ部活動に入っている仲のよい友だちが入院すれば見舞いに行くのであろうが、それ以外の人はいわば他人で、見舞いに行く気になれないのであろう。

表4　心の通い合い――心理的空間が狭く

(%)

		きっと行く	行くかも	かなり気がかり	少し気がかり	なんとも思わない	きっと行く＋行くかも
同じ学級の仲のよい友だち	83年	67.0	17.8	9.6	4.0	1.6	84.8
	95年	59.8	21.7	13.0	4.5	1.0	81.5
同じ部活動の友だち	83年	31.9	30.1	18.8	14.2	5.0	62.0
	95年	32.1	27.0	21.8	13.6	5.5	59.1
同じ学級のふつうの友だち	83年	19.4	43.5	18.8	15.1	3.2	62.9
	95年	9.5	37.4	26.3	22.1	4.7	46.9
担任の先生	83年	15.9	21.3	17.0	29.4	16.4	37.2
	95年	9.6	18.3	19.4	37.0	15.7	27.9
違う学級の友だち	83年	12.2	25.1	20.5	32.7	9.5	37.3
	95年	12.0	23.7	22.9	30.9	10.5	35.7
校長先生	83年	5.0	10.8	21.0	43.2	20.0	15.8
	95年	1.7	4.7	13.5	45.1	35.0	6.4
違う学年の友だち	83年	5.7	13.4	16.9	38.7	25.3	19.1
	95年	3.9	11.0	16.0	38.5	30.6	14.9

注「次の人が入院したと聞いたら見舞いに行くか」

第３章 家庭の中の子どもたち

１．親との関係

中学生の時期は第２次反抗期のまっただ中で、親子関係が冷却するといわれてきた。しかし、このところ、反抗期が姿を消して、親子関係の円満な家庭が増えてきたといわれる。

表５に示したように、親とうまくいっている割合は1995年の場合、父親と46.3%、母親と56.7%で、「やや」を含めると８～９割が親との仲がよいと答えている。そうした意味では現在の中学生の親子関係は円満のようだが、それでも1983年と比較すると、円満の割合が父親で8.2%、母親で7.4%低下している。

したがって、一昔前と比べると親子の密着

ぶりが低下してきたように思えるが、そうした背景を確かめたいと**表6**に属性分析を示してみた。表を図化した**図2**の学年別の結果に目を通してほしい。

1983年の場合、中1から中2、そして中3へと学年が上がるにつれて、親との関係が低下している。これは、中学生たちが学年が上がるにつれて、親を批判的にみていることを意味しており、子どもの成長を考えると納得のできる数値である。それに対し、1995年のデータでは学年が上がっても親に対する評価がほとんど低下していない。

かつての子どもたちは、中1の頃、親を尊敬しているが、中3になると親離れをしはじめる。しかし、現代の子は中1の頃、親とそれほど密着はしていないが、かといって、中3になっても親離れの兆しを示していない。そう考えると、いくつになっても親との仲が睦まじいのが現代の中学生の実像なのであろう。

表5　親との関係――かなりうまくいっている

(%)

		うまくいっている				うまくいっていない			
		とても	かなり	小計	やや	やや	あまり	全然	小計
父親	83年	28.0	26.5	54.5	32.0	5.7	4.1	3.7	13.5
	95年	25.8	20.5	46.3	34.5	6.6	6.9	5.7	19.2
母親	83年	33.6	30.5	64.1	28.7	4.5	1.2	1.5	7.2
	95年	30.7	26.0	56.7	31.5	5.6	2.8	3.4	11.8

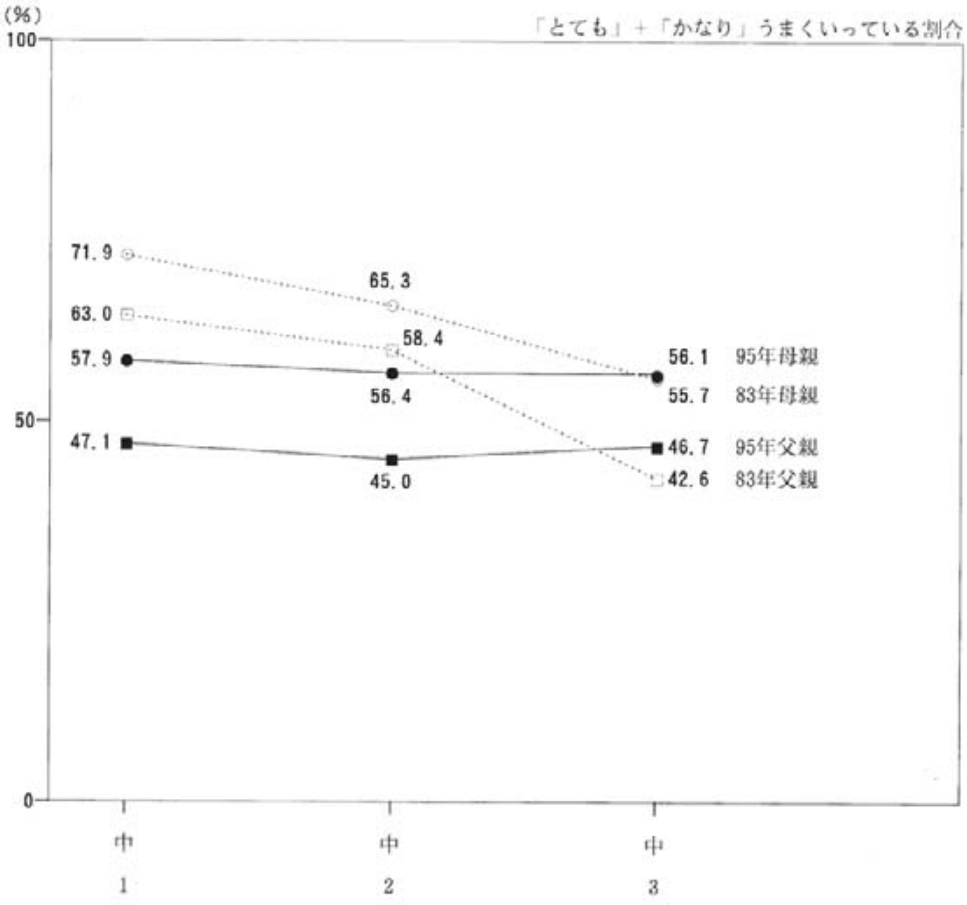
表6　親との関係 × 属性――中3も仲よく

(%)

		学年			性	
		中1	中2	中3	男子	女子
父親	83年	63.0	58.4	42.6	54.8	54.1
	95年	47.1	45.0	46.7	44.9	47.6
母親	83年	71.9	65.3	55.7	57.3	71.4
	95年	57.9	56.4	56.1	48.2	65.0

「とても」+「かなり」うまくいっている割合

図２　親との関係 × 学年――中３の評価がカギ



なお、**表7**にふだんの生活がどれくらい親がかりなのかを示した。さすがに「自分の部屋の掃除」や「机の片づけ」は自分でやっている生徒が多い。しかし、7割以上の生徒が「下着の洗濯」や「制服の手入れ」などを親に頼って生活している。そして、そうした生活は1983年と同じように1995年にも見られている。

表7　生活の自立――親がかり

(%)

		自分			親		
		いつも	ほとんど	小計	ほとんど	いつも	小計
下着の洗濯	83年	6.4	7.4	13.8	26.6	59.6	86.2
	95年	10.6	7.1	17.7	25.5	56.8	82.3
運動着の洗濯	83年	7.5	7.9	15.4	26.4	58.2	84.6
	95年	5.4	5.1	10.5	23.7	65.8	89.5
布団干し	83年	11.4	13.2	24.6	33.7	41.7	75.4
	95年	12.5	9.6	22.1	33.7	44.2	77.9
制服の手入れ	83年	15.5	15.2	30.7	28.1	41.2	69.3
	95年	14.7	13.3	28.0	28.5	43.5	72.0
食器の後片づけ	83年	22.8	15.2	38.0	38.4	23.6	62.0
	95年	24.7	15.7	40.4	36.3	23.3	59.6
部屋の掃除	83年	31.1	34.3	65.4	26.8	7.8	34.6
	95年	38.1	28.1	66.2	25.0	8.8	33.8
机の片づけ	83年	64.3	26.6	90.9	8.3	0.8	9.1
	95年	71.0	20.3	91.3	7.4	1.3	8.7
耳の穴の掃除	83年	53.4	16.4	69.8	14.2	16.0	30.2
	95年	76.0	11.2	87.2	6.5	6.3	12.8

2．親を超える

中学生であろうが、親と仲のよいことは好ましいことで非難されるべき性質のものではあるまい。そうはいうものの、中学生がどういう気持ちで親たちを見つめているのかが知りたくなる。

親に対する評価を知るのにいくつかの接近方法が考えられるが、ここでは、1983年の調査の際に利用した「親を超えたか」に注目してみた。

親を超えられるという気持ちを持てることが反抗期の前提になろう。しかし、1983年のデータでは、中学生は父親はむろんのこと、母親も超えにくいと感じていた。そこで、父親あるいは母親を超えたか、それとも、超えるとしたらいつ超えられそうかを、1983年と同じ項目を使って設問してみた。

全体の結果は**表8**の通りだが、これではわかりにくいので、「親を超えられそうにない」と答えた割合を要約する形で**表9**にまとめてみた。ほとんどの項目で1995年は1983年より数値が上がっている。この10年の間に親を超えにくいと感じている割合がますます増加している。

表10は「親を超えられそうにない」を属性別に集計したものだが、体力を例にして、学年ごとの変化を確かめると**図3**のような結果になる。この中で注目されるのは、1995年の場合、中1より中3の方が「親を超えにくい」と思っている事実であろう。

成長するにつれて、親の大きさがわかってきたといえばよいのか、「がんばる力」や「社会常識」でも、中3の生徒の方が中1の生徒より「親を超えにくい」と感じている割合が高い。

親の力強い部分も、人間的にやさしい部分も知っている。そうした親のよさを感じているので、親と争うことなく、円満に暮らしているのであろう。よい子どもたちだと思う反面、中学生としては親に頼っているだけで、少し幼いのではという印象を受ける。

表8　親を超えたか――いずれは超える

(%)

			超えた			いずれ超えられる			ずっと超えられないだろう
			小学	中学	最近	高校	20歳	25歳	
人とのつき合い方	父親	83年	4.9	5.4	9.3	22.7	24.2	18.0	15.5
		95年	6.8	6.2	8.5	21.4	20.2	19.9	17.0
	母親	83年	3.6	5.4	9.2	25.5	24.8	16.2	15.3
		95年	4.2	5.8	9.2	23.0	20.7	16.7	20.4
がんばる力	父親	83年	2.0	5.0	10.2	30.1	18.7	15.9	18.1
		95年	5.5	7.7	11.1	23.5	15.9	15.2	21.1
	母親	83年	3.4	6.1	10.8	31.0	17.7	15.9	15.1
		95年	5.1	7.4	10.8	23.8	15.9	15.1	21.9
社会常識	父親	83年	1.2	2.8	3.4	16.2	26.9	30.5	19.0
		95年	2.6	3.0	5.4	12.9	22.8	29.7	23.6
	母親	83年	1.0	2.9	6.2	20.8	29.6	25.8	13.7
		95年	2.7	3.6	6.0	17.2	25.9	25.0	19.6
社会についての見方	父親	83年	0.7	1.9	3.9	15.3	25.2	30.2	22.8
		95年	2.5	2.5	4.0	15.5	22.6	27.6	25.3
	母親	83年	1.2	2.6	4.2	18.1	30.5	27.9	15.5
		95年	2.5	3.2	4.9	19.2	26.2	25.4	18.6
数学の学力	父親	83年	4.9	11.4	14.1	32.4	11.6	8.1	17.5
		95年	5.8	11.2	10.2	25.3	12.1	9.6	25.8
	母親	83年	7.8	18.6	18.3	31.6	9.7	6.1	7.9
		95年	8.8	15.1	15.7	26.9	11.1	8.8	13.6
体力	父親	83年	2.7	8.8	11.2	34.0	14.9	9.5	18.9
		95年	2.9	8.0	8.0	25.2	14.1	10.5	31.3
	母親	83年	21.5	25.8	24.5	17.3	5.4	3.1	2.4
		95年	23.6	28.0	18.6	14.9	5.2	3.8	5.9
経済力	父親	83年	0.9	1.1	1.7	4.4	16.7	44.7	30.5
		95年	2.2	0.6	1.0	4.6	15.8	42.4	33.4
	母親	83年	0.8	1.2	1.5	9.6	32.7	39.3	14.9
		95年	2.2	1.2	1.7	10.1	32.7	39.3	12.8

表9　親を超えられそうにない（要約）――特に95年

（%）

	父親			母親		
	83年		95年	83年		95年
人とのつき合い方	33.5	<	36.9	31.5	<	37.1
がんばる力	34.0	<	36.3	31.0	<	37.0
社会常識	49.5	<	53.3	39.5	<	44.6
社会についての見方	53.0		52.9	43.4	<	44.0
数学の学力	25.6	<	35.4	14.0	<	22.4
体力	28.4	<	41.8	5.5	<	9.7
経済力	75.2	<	75.8	54.2	>	52.1

「親を（25歳くらいまで）超えられそうにない」と思う割合

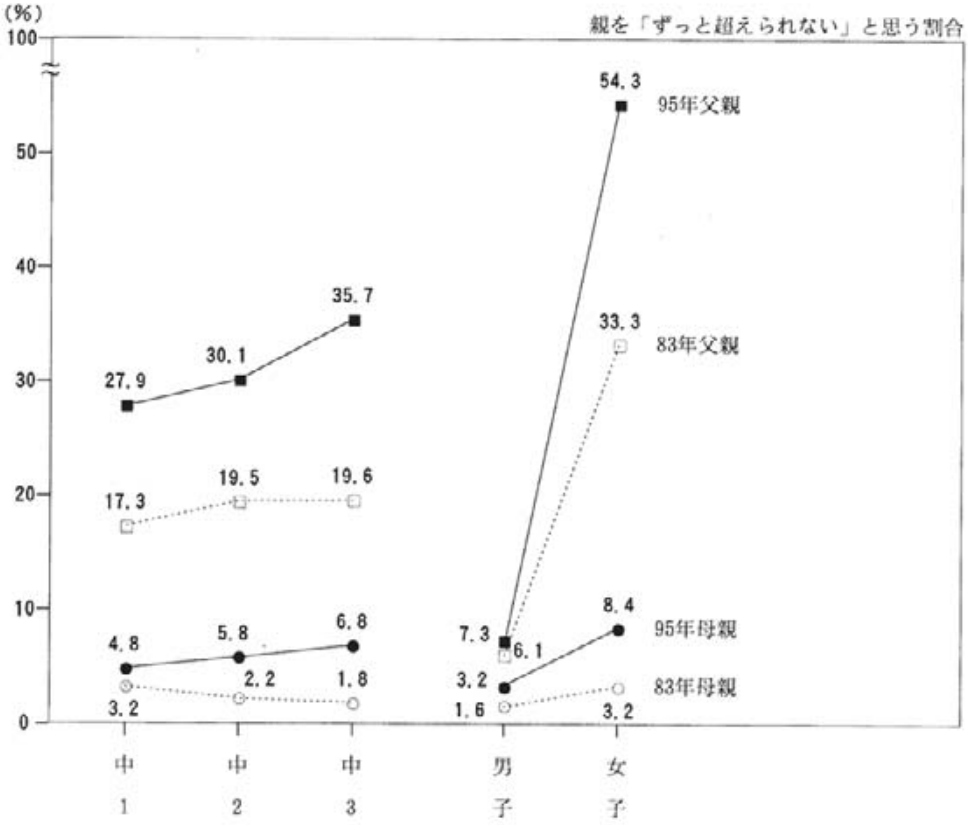
表10　親を超えられそうにない × 属性――特に中3が

（%）

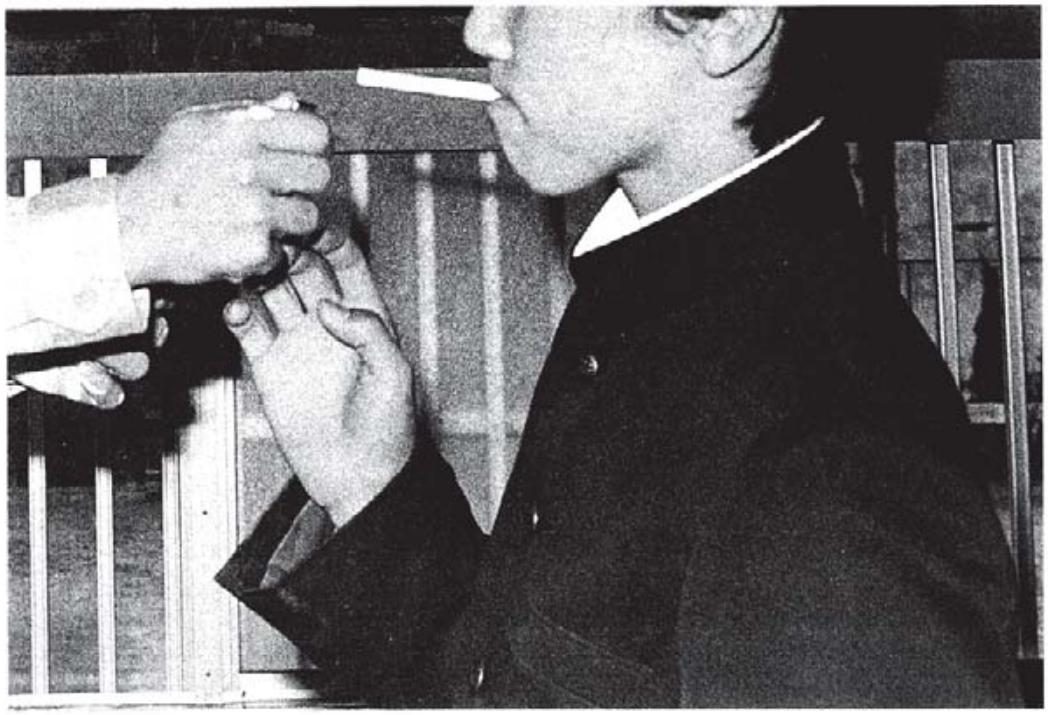
			学年			性	
			中1	中2	中3	男子	女子
がんばる力	父親	83年	16.2	16.7	21.4	16.5	20.0
		95年	17.4	20.0	25.3	20.7	21.6
	母親	83年	14.6	12.8	17.9	13.6	16.5
		95年	19.0	19.7	26.5	18.3	25.1
社会常識	父親	83年	19.0	17.0	21.0	15.9	22.3
		95年	20.8	24.3	25.2	19.9	27.1
	母親	83年	12.9	11.4	16.9	11.1	16.6
		95年	18.8	19.6	20.4	16.6	22.5
数学の力	父親	83年	17.9	16.9	17.6	13.2	22.1
		95年	24.2	24.4	28.1	20.8	30.4
	母親	83年	9.2	9.2	5.4	6.3	9.7
		95年	15.7	11.5	13.7	11.5	15.5
体力	父親	83年	17.3	19.5	19.6	6.1	33.3
		95年	27.9	30.1	35.7	7.3	54.3
	母親	83年	3.2	2.2	1.8	1.6	3.2
		95年	4.8	5.8	6.8	3.2	8.4

親を「ずっと超えられない」と思う割合

図3　体力は超えられない × 属性



第４章 規範感覚の崩れ



１．善悪のけじめ

1980年代の前半は校内暴力や家庭内暴力が問題になり、中学生の様変わりが社会的な関心を集めていた。そこで、1983年に生徒たちの規範感覚がどうなっているのかを尋ねる調査を実施した。そして、中学生が予想していたより健全な善悪の感覚を持っていることを明らかにした。

それから12年を経て、中学生の規範感覚はどうなっているのか。**図４（表11）**に示したように、すべての項目について、1995年は「悪い」と思う割合が低下している。厳密にいうなら、1983年では「放置してある他人の自転車に乗る」や「自室でタバコをすう」は「とても悪い」と思われていた。そして、1995年でも「悪い」と思っている生徒が多いが、「とても」の割合が1983年より２割前後も低下している。悪いことには違いないが、悪いと思う感覚が弱まっている。

図4　悪いと思う割合

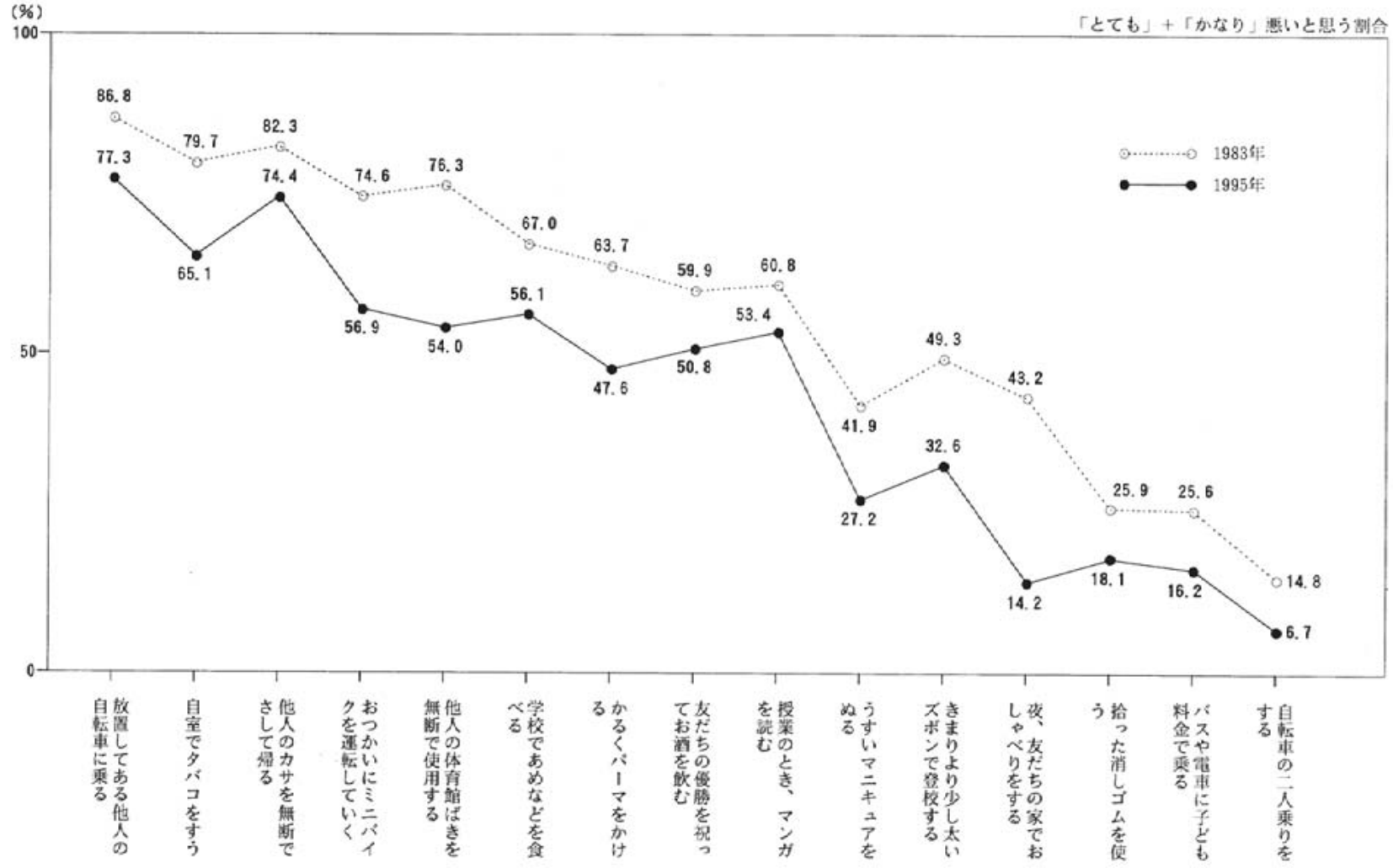

(%)
100
50
0
「とても」＋「かなり」悪いと思う割合
1983年
1995年
86.8
79.7
82.3
74.6
76.3
67.0
63.7
59.9
60.8
41.9
49.3
43.2
25.9
25.6
14.8
77.3
65.1
74.4
56.9
54.0
56.1
47.6
50.8
53.4
27.2
32.6
14.2
18.1
16.2
6.7
放置してある他人の自転車に乗る
自室でタバコをすう
他人のカサを無断でさして帰る
おつかいにミニバイクを運転していく
他人の体育館ばきを無断で使用する
学校であめなどを食べる
かるくパーマをかける
友だちの優勝を祝ってお酒を飲む
授業のとき、マンガを読む
うすいマニキュアをぬる
きまりより少し太いズボンで登校する
夜、友だちの家でおしゃべりをする
拾った消しゴムを使う
バスや電車に子ども料金で乗る
自転車の二人乗りをする

表11　善悪の感覚――悪の感覚の低下

(%)

		悪い				悪くない	
		とても	かなり	小計	少し	あまり	全然
放置してある他人の自転車に乗る	83年	64.8	22.0	86.8	8.9	2.2	2.1
	95年	47.3	30.0	77.3	15.4	3.3	4.0
自室でタバコをすう	83年	62.8	16.9	79.7	10.9	4.2	5.2
	95年	39.5	25.6	65.1	17.7	7.8	9.4
他人のカサを無断でさして帰る	83年	56.6	25.7	82.3	11.9	2.7	3.1
	95年	41.7	32.7	74.4	18.7	2.8	4.1
おつかいにミニバイクを運転していく	83年	51.1	23.5	74.6	15.9	5.3	4.2
	95年	25.8	31.1	56.9	25.5	9.1	8.5
他人の体育館ばきを無断で使用する	83年	48.9	27.4	76.3	16.6	4.5	2.6
	95年	24.7	29.3	54.0	29.4	8.9	7.7
学校であめなどを食べる	83年	41.8	25.2	67.0	20.3	7.5	5.2
	95年	26.1	30.0	56.1	28.1	8.6	7.2
かるくパーマをかける	83年	40.8	22.9	63.7	19.8	10.0	6.5
	95年	22.1	25.5	47.6	28.3	13.1	11.0
友だちの優勝を祝ってお酒を飲む	83年	40.3	19.6	59.9	18.9	11.8	9.4
	95年	27.3	23.5	50.8	25.9	12.8	10.5
授業のとき、マンガを読む	83年	30.2	30.6	60.8	25.1	9.0	5.1
	95年	23.8	29.6	53.4	29.1	9.1	8.4
うすいマニキュアをぬる	83年	23.1	18.8	41.9	24.7	18.7	14.7
	95年	11.7	15.5	27.2	32.5	21.6	18.7
きまりより少し太いズボンで登校する	83年	22.9	26.4	49.3	27.6	13.2	9.9
	95年	12.1	20.5	32.6	36.7	17.7	13.0
夜、友だちの家でおしゃべりをする	83年	20.2	23.0	43.2	26.7	18.4	11.7
	95年	4.9	9.3	14.2	22.9	32.0	30.9
拾った消しゴムを使う	83年	11.9	14.0	25.9	31.8	23.2	19.1
	95年	8.0	10.1	18.1	29.8	25.6	26.5
バスや電車に子ども料金で乗る	83年	11.2	14.4	25.6	40.7	20.5	13.2
	95年	5.3	10.9	16.2	42.3	22.5	19.0
自転車の二人乗りをする	83年	6.4	8.4	14.8	29.7	32.3	23.2
	95年	2.6	4.1	6.7	22.9	33.8	36.6

生徒たちの悪いことに対する感覚が多少麻痺してきたのであろうか。そして、**表12**によれば、ほとんどすべての項目で悪いと思う割合が学年が上がるにつれて低下していく。特に中３の生徒は悪いと思う割合が低くなる。なお、細かな議論になるが、「放置してある他人の自転車に乗る」が1983年は中１の71.4％から中３の55.1％へと16.3％（比率的には中１を100として77.2％）低下しているが、1995年では49.5％から49.3％へとわずかに0.2％(99.6％)低下したのにすぎない。

この事例は極端にしても、「自室でタバコをすう」でも中１から中３へ移るにつれて、1983年が74.0％から43.7％へ30.3％（59.1％）低下しているのに、1995年では45.5％から34.7％で10.8％（76.3％）の低下にとどまっている。

つまり、かつての中学生は中１から中３へ学年が変わるにつれて、無理にでも悪さを悪さと思おうとしないつっぱり的な感覚を持っていた。悪さぶってみせる世代で、おとなになる過程の一断面という評価のできる時期であろう。それに対し、現在の中学生は中３になっても、中１と同じような規範感覚を抱いている。それだけ、中学生の精神面での成長が遅くなってきたのであろうか。

表12　善悪の感覚 × 属性――中3になると麻痺

(%)

		中1	中2	中3	男子	女子
放置してある他人の自転車に乗る	83年	71.4	60.2	55.1	64.1	65.4
	95年	49.5	43.1	49.3	44.1	50.2
自室でタバコをすう	83年	74.0	56.7	43.7	64.3	60.8
	95年	45.5	39.4	34.7	38.2	40.7
他人のカサを無断でさして帰る	83年	62.6	50.8	51.4	55.2	58.5
	95年	45.3	35.2	44.5	36.7	46.3
おつかいにミニバイクを運転していく	83年	63.5	42.9	32.4	53.6	48.1
	95年	30.0	25.5	22.6	26.1	25.5
他人の体育館ばきを無断で使用する	83年	59.4	40.4	36.3	50.3	47.3
	95年	32.0	21.9	21.0	23.9	25.3
学校であめなどを食べる	83年	58.1	30.2	18.9	46.7	35.9
	95年	34.6	24.5	20.5	27.3	25.0
かるくパーマをかける	83年	53.9	29.4	25.4	43.9	37.0
	95年	25.5	21.0	20.2	24.0	20.3
友だちの優勝を祝ってお酒を飲む	83年	51.4	31.1	26.5	40.5	39.8
	95年	31.4	28.0	23.0	26.0	28.3
授業のとき、マンガを読む	83年	40.5	23.4	15.0	35.1	24.3
	95年	27.3	20.8	23.6	25.1	22.4
うすいマニキュアをぬる	83年	30.1	18.1	13.2	31.8	12.7
	95年	10.4	12.2	12.3	17.3	6.5
きまりより少し太いズボンで登校する	83年	30.1	16.7	14.5	24.0	21.5
	95年	13.0	11.1	12.2	13.7	10.4
夜、友だちの家でおしゃべりをする	83年	26.6	15.7	11.1	22.1	17.9
	95年	6.3	3.9	4.8	6.6	3.3
拾った消しゴムを使う	83年	14.4	10.7	7.5	12.5	11.1
	95年	10.4	6.3	7.5	8.0	7.9
バスや電車に子ども料金で乗る	83年	15.4	7.3	7.2	14.7	7.2
	95年	3.9	4.1	7.6	6.7	4.0
自転車の二人乗りをする	83年	9.9	2.7	3.4	7.7	4.8
	95年	2.3	2.2	3.2	4.1	1.1

「とても悪い」と思う割合

2．校則への評価

規範感覚に対するこうした変化は、中学の校則に対する見方にどのような影響を与えているのであろうか。

1980年代前半は校則についての批判はなされていたが、学校サイドで校則の見直しをする動きは少なかった。しかし、不登校やいじめなどの増加を背景として、校則を緩め、自由な感じのする学校づくりへの気運が高まっている。10年の間にこうした変化が生まれているが、**図5**（**表13**）によれば、校則の多くについて、「無意味だから守らなくてもよい」「そんな校則は撤廃すべき」の反応が高まっている。とくに、「男子の髪は丸刈り」や「女子の髪は肩まで」「男子の靴下は紺か黒」「女子の髪は黒いゴムでとめる」などはつまらない規則という声が強い。

このように中学生たちは、髪型や服装などの細かな規定は廃止してほしいと訴えている。正直な印象として、この項目については中学生の主張に共感できるものを感じる。学校としては、もう少し生徒を信用して校則を緩めてはどうかと思う。

なお、**表14**に校則についての評価を属性と関連させて掲げたが、かつての生徒は「髪を染めてはいけない」を例にとると、これを無意味と思うのは中1が12.6%だが、中3になると22.3%へと倍増する。つまり、中3になると批判する態度が強まる。それに対し、1995年では39.9%（中1）から35.1%（中3）へと、むしろ悪いと思う割合が減少している。奇妙なことに、中3より中1の方が批判的な態度をとっている印象を受ける。

中学3年間を通して、生徒たちは心身ともに成長していくのであろうが、なぜか、1995年のデータでは生徒たちの心の面での成長が認められないような感じがする。

図5　無意味な校則と思う割合

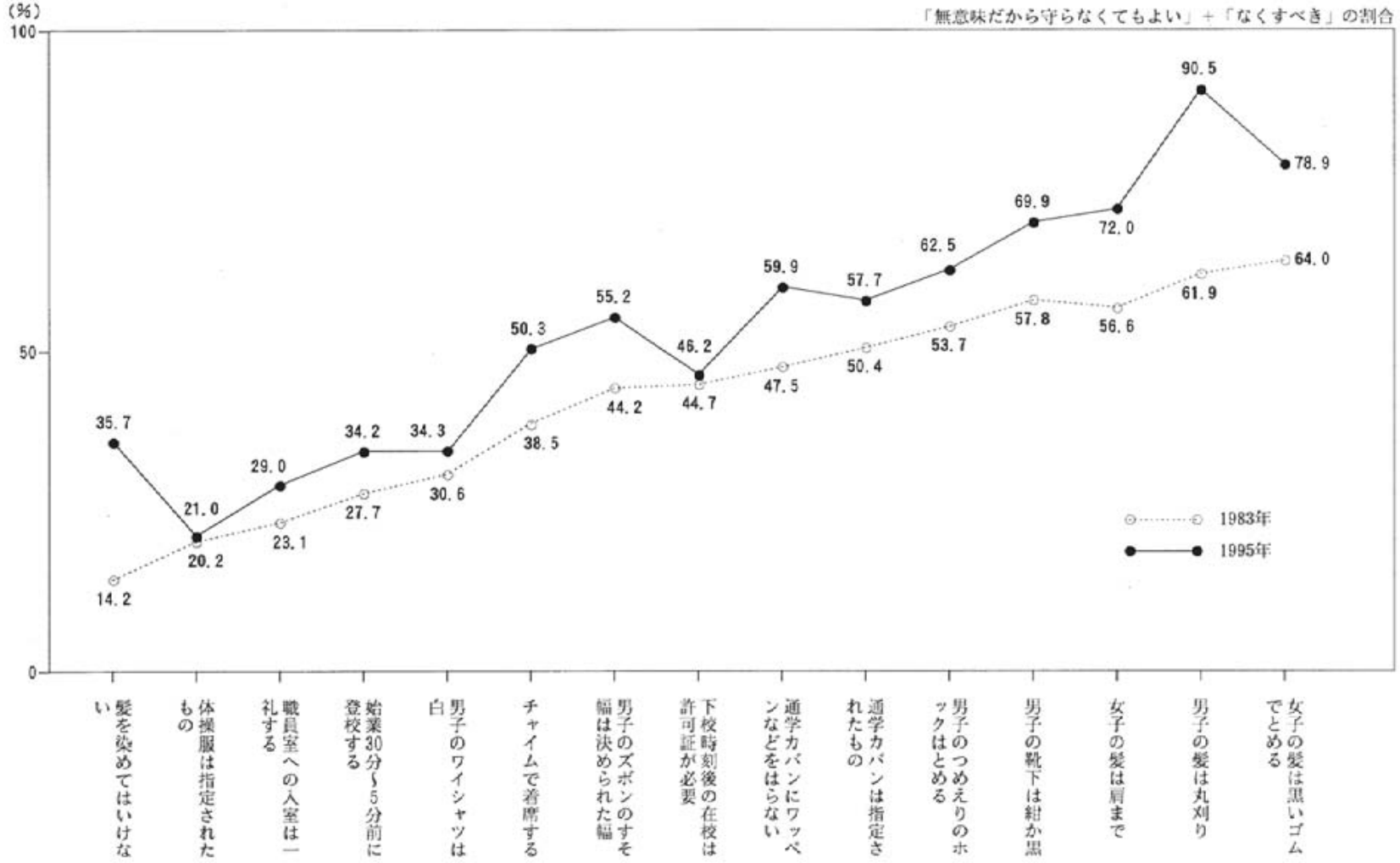


表13　校則についての評価――校則に批判的

(%)

		必要なきまり	無意味だが守るべき	無意味だから守らなくてもよい	なくすべき	小計
髪を染めてはいけない	83年	67.1	18.7	5.4	8.8	14.2
	95年	35.0	29.3	15.8	19.9	35.7
体操服は指定されたもの	83年	46.3	33.5	10.6	9.6	20.2
	95年	42.5	36.5	9.3	11.7	21.0
職員室への入室は一礼する	83年	45.0	31.9	12.7	10.4	23.1
	95年	37.2	33.8	15.1	13.9	29.0
始業30分～5分前に登校する	83年	35.6	36.7	13.0	14.7	27.7
	95年	31.1	34.7	14.3	19.9	34.2
男子のワイシャツは白	83年	35.5	33.9	15.1	15.5	30.6
	95年	28.9	36.8	17.8	16.5	34.3
チャイムで着席する	83年	25.0	36.5	23.8	14.7	38.5
	95年	19.1	30.6	27.8	22.5	50.3
男子のズボンのすそ幅は決められた幅	83年	20.6	35.2	23.5	20.7	44.2
	95年	10.6	34.2	31.5	23.7	55.2
下校時刻後の在校は許可証が必要	83年	23.9	31.4	22.4	22.3	44.7
	95年	23.4	30.4	22.1	24.1	46.2
通学カバンにワッペンなどをはらない	83年	22.7	29.8	26.0	21.5	47.5
	95年	12.3	27.8	30.8	29.1	59.9
通学カバンは指定されたもの	83年	19.9	29.7	23.6	26.8	50.4
	95年	13.9	28.4	22.5	35.2	57.7
男子のつめえりのホックはとめる	83年	15.2	31.1	32.0	21.7	53.7
	95年	8.9	28.6	35.5	27.0	62.5
男子の靴下は紺か黒	83年	13.1	29.1	26.3	31.5	57.8
	95年	6.2	23.9	30.9	39.0	69.9
女子の髪は肩まで	83年	14.3	29.1	25.4	31.2	56.6
	95年	5.6	22.4	24.2	47.8	72.0
男子の髪は丸刈り	83年	7.3	30.8	18.3	43.6	61.9
	95年	1.4	8.1	17.3	73.2	90.5
女子の髪は黒いゴムでとめる	83年	10.1	25.9	29.1	34.9	64.0
	95年	3.3	17.8	26.7	52.2	78.9

表14　校則についての評価 × 属性――中1も批判的

（%）

		中1	中2	中3	男子	女子
髪を染めてはいけない	83年	12.6	13.4	22.3	15.9	12.4
	95年	39.9	32.4	35.1	36.3	35.1
体操服は指定されたもの	83年	21.3	17.1	29.9	23.8	16.5
	95年	24.1	19.7	19.7	25.4	16.9
職員室への入室は一礼する	83年	20.6	22.4	33.4	26.2	19.9
	95年	32.0	28.2	27.4	33.2	25.0
始業30分～5分前に登校する	83年	26.3	26.6	36.1	32.9	22.3
	95年	35.5	32.3	34.9	41.1	27.7
男子のワイシャツは白	83年	26.7	28.0	52.6	33.0	28.0
	95年	35.2	34.1	34.0	36.6	32.1
チャイムで着席する	83年	37.4	37.0	48.0	38.6	38.5
	95年	54.0	47.1	50.3	53.6	47.0
男子のズボンのすそ幅は決められた幅	83年	37.0	48.5	48.1	50.4	37.8
	95年	58.9	55.6	52.0	59.2	51.5
下校時刻後の在校は許可証が必要	83年	40.4	42.2	68.6	46.8	42.6
	95年	45.5	45.0	47.9	50.3	42.4
通学カバンにワッペンなどをはらない	83年	42.1	49.9	53.4	43.9	51.1
	95年	62.8	56.2	61.3	56.7	63.1
通学カバンは指定されたもの	83年	46.1	51.0	60.9	50.3	50.5
	95年	60.2	58.8	54.9	58.7	57.1
男子のつめえりのホックはとめる	83年	47.6	59.0	50.0	63.6	43.4
	95年	62.7	57.7	66.8	64.3	60.8
男子の靴下は紺か黒	83年	50.9	62.3	60.5	63.8	51.7
	95年	72.1	68.4	69.7	72.8	67.1
女子の髪は肩まで	83年	51.7	57.1	68.9	51.9	61.3
	95年	75.2	70.3	71.0	77.9	66.5
男子の髪は丸刈り	83年	57.5	64.8	62.7	66.7	56.9
	95年	90.6	89.8	91.1	90.5	90.5
女子の髪は黒いゴムでとめる	83年	58.1	67.2	68.9	63.4	64.6
	95年	78.8	76.3	81.5	80.4	77.6

「無意味だから守らなくてもよい」＋「なくすべき」の割合

第５章 性差についての変化

１．将来の家庭生活

1980年代から1990年にかけて多くの面で社会的な変化が生じているが、そうした中でも女性をめぐる意識の変わり方はもっとも著しいように思える。

そこで、まず手始めに、中学生たちに「好きな異性がいるか」を尋ねてみた。ほぼ５割の中学生が、好きな異性がいると答えている(**表15**)。

思春期として当然の反応であろうが、生まれ変われたら男子女子のどちらを望むかの結果を**表16**に示した。この項目は、女性が生きにくい社会だと多くの女子が男子への生まれ変わりを願うが、女性の生きやすい社会だと女子は女子への生まれ変わりを望むようになるといわれる。そうした意味合いをもたせて、表の数値をみてみると、男子のほぼ９割が男子への生まれ変わりを求め、女子の生まれ変わりの望みはほぼ男女半々という傾向は1983年と1995年とでほとんど変わっていない。こうした数値を手がかりにすると、ジェンダーと呼ばれる女性問題に対する意識は10年間であまり変わっていないように見える。

そこで、もう少し具体的に10項目の育児や家事を示して、(女子には)「将来、自分たちの家庭を持ったとき、夫に家事を手伝ってほしいか」、(男子には)「手伝ってあげたいと思うか」を尋ねてみた。

図６(表17)の結果から明らかなように、「洗濯物を干す」から「ベッドの直し」まで、すべての項目で、1983年より1995年の方が手伝ってあげたい(もらいたい)という割合が増加している。

もちろん、女子が「手伝ってほしい」と思うのは当然であろうが、男子たちは将来の家事協力をどう考えているのか。「洗濯物を干

す」を例にとると、女子が「手伝ってほしい」と思う割合は1983年の12.9%から1995年の36.4%へと23.5%（1983年を1.0とした場合2.82倍）増加している。それと同時に、男子も19.6%から39.2%へ19.6%（1983年を1.0として2.0倍）の増加を示している（**表18**）。

つまり、1995年の男子は1983年より、男子たちも将来結婚をしたら家事育児をするつも

表15　好きな異性がいるか（「いる」割合）―― 5割

（%）

	学年			性		全体
	中1	中2	中3	男子	女子	
83年	49.6	57.2	66.8	45.0	68.3	57.0
95年	51.9	48.8	48.5	41.8	57.0	49.7

表16　生まれ変わり――男子は男子に

（%）

		男に			女に		
		絶対	できれば	小計	できれば	絶対	小計
83年		33.2	33.3	66.5	21.4	12.1	33.5
95年		34.1	33.3	67.4	19.8	12.8	32.6
男子	83年	56.1	32.2	88.3	8.1	3.6	11.7
	95年	50.9	35.8	86.7	6.2	7.1	13.3
女子	83年	12.2	34.4	46.6	33.6	19.8	53.4
	95年	18.0	30.9	48.9	32.7	18.4	51.1

りと答えている。しかし、そうした男子の気持ち以上に、女子は男子に家事や育児に参加してほしいと願っている。

したがって、これから生徒たちが成人して家庭を作るようになったら、夫と妻とが協力して家事育児を担う男女差の少ない家庭が誕生するのは確かなように思われる。

図6　男性の手伝い

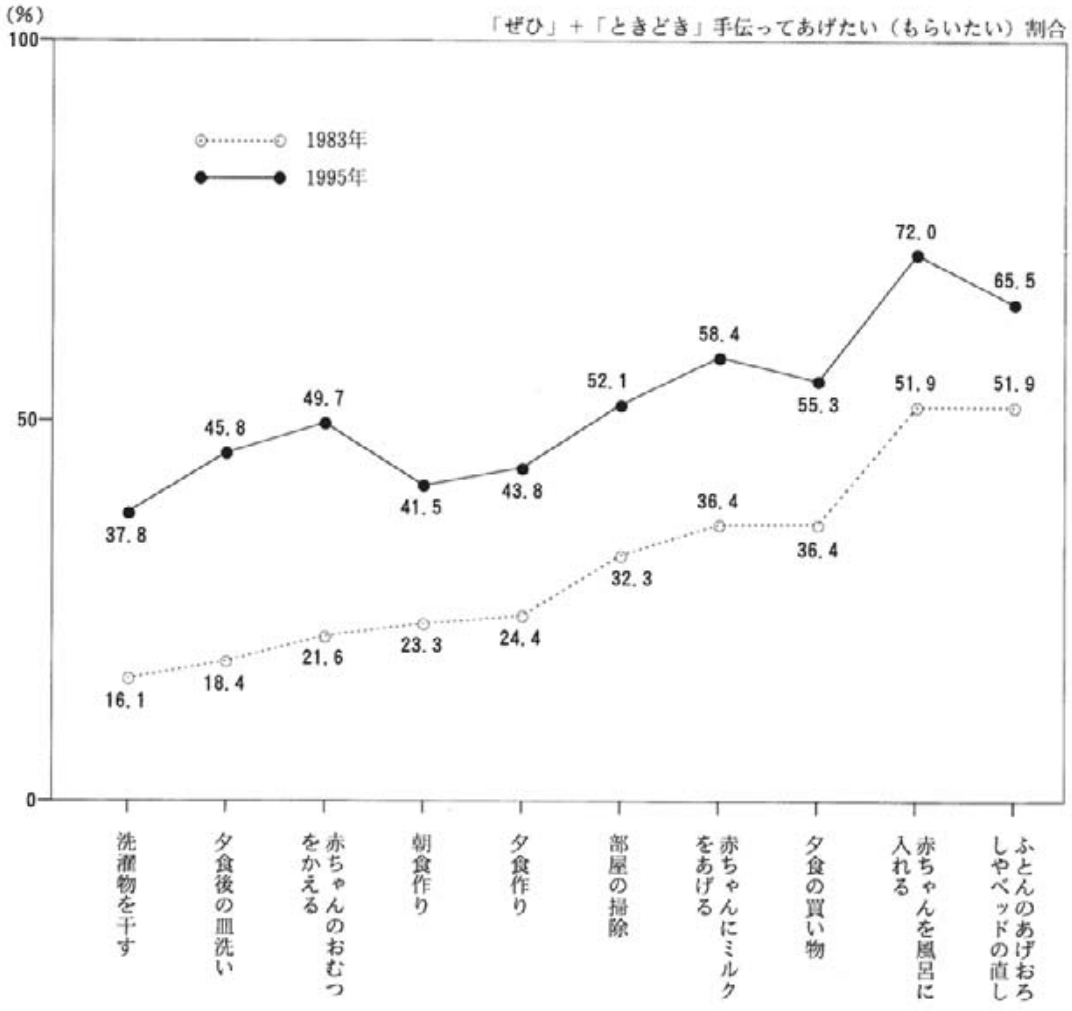


表17　将来の家事手伝い――夫と妻の協力

（%）

		手伝ってあげたい（もらいたい）				手伝ってあげたくない（もらいたくない）	
		ぜひ	ときどき	小計	忙しいときだけ	あまり	絶対
洗濯物を干す	83年	4.1	12.0	16.1	28.1	32.2	23.6
	95年	6.7	31.1	37.8	36.8	15.6	9.8
夕食後の皿洗い	83年	5.0	13.4	18.4	31.2	28.7	21.7
	95年	10.2	35.6	45.8	33.4	12.9	7.9
赤ちゃんのおむつをかえる	83年	5.0	16.6	21.6	32.9	27.2	18.3
	95年	12.4	37.3	49.7	31.3	10.1	8.9
朝食作り	83年	5.1	18.2	23.3	34.0	27.3	15.4
	95年	7.4	34.1	41.5	35.6	14.4	8.5
夕食作り	83年	5.3	19.1	24.4	30.1	27.7	17.8
	95年	7.4	36.4	43.8	33.0	14.3	8.9
部屋の掃除	83年	7.7	24.6	32.3	32.7	23.2	11.8
	95年	13.9	38.2	52.1	31.0	10.3	6.6
赤ちゃんにミルクをあげる	83年	7.6	28.8	36.4	35.0	17.4	11.2
	95年	14.1	44.3	58.4	27.3	7.7	6.6
夕食の買い物	83年	8.1	28.3	36.4	26.6	22.7	14.3
	95年	12.7	42.6	55.3	28.7	9.9	6.1
赤ちゃんを風呂に入れる	83年	14.6	37.3	51.9	28.1	12.1	7.9
	95年	31.0	41.0	72.0	17.9	5.3	4.8
ふとんのあげおろしやベッドの直し	83年	17.2	34.7	51.9	33.1	9.1	5.9
	95年	21.1	44.4	65.5	26.3	4.5	3.7

表18　将来の家事手伝い × 属性

（%）

		中1	中2	中3	男子	女子
洗濯物を干す	83年	19.3	14.9	16.8	19.6	12.9
	95年	38.7	34.9	39.6	39.2	36.4
夕食後の皿洗い	83年	19.9	17.1	20.9	19.1	17.4
	95年	51.0	42.3	44.8	42.5	48.9
赤ちゃんのおむつをかえる	83年	23.0	19.3	29.2	21.3	21.9
	95年	48.6	47.3	53.1	38.6	60.2
朝食作り	83年	27.4	21.5	24.7	27.0	19.7
	95年	42.8	40.0	41.6	42.9	40.2
夕食作り	83年	28.7	22.0	28.2	27.3	21.5
	95年	44.9	40.3	46.1	41.6	45.8
部屋の掃除	83年	32.4	31.4	35.4	40.1	24.9
	95年	56.3	50.3	50.4	58.0	46.5
赤ちゃんにミルクをあげる	83年	35.6	34.6	44.2	37.6	35.1
	95年	59.6	56.8	59.1	56.4	60.4
夕食の買い物	83年	33.7	35.9	41.5	36.2	36.6
	95年	52.8	55.2	57.3	51.8	58.5
赤ちゃんを風呂に入れる	83年	45.1	53.1	56.8	45.7	57.7
	95年	70.5	69.4	75.7	63.9	79.7
ふとんのあげおろしやベッドの直し	83年	53.5	51.7	50.8	59.9	44.6
	95年	63.5	66.1	66.8	69.3	62.1

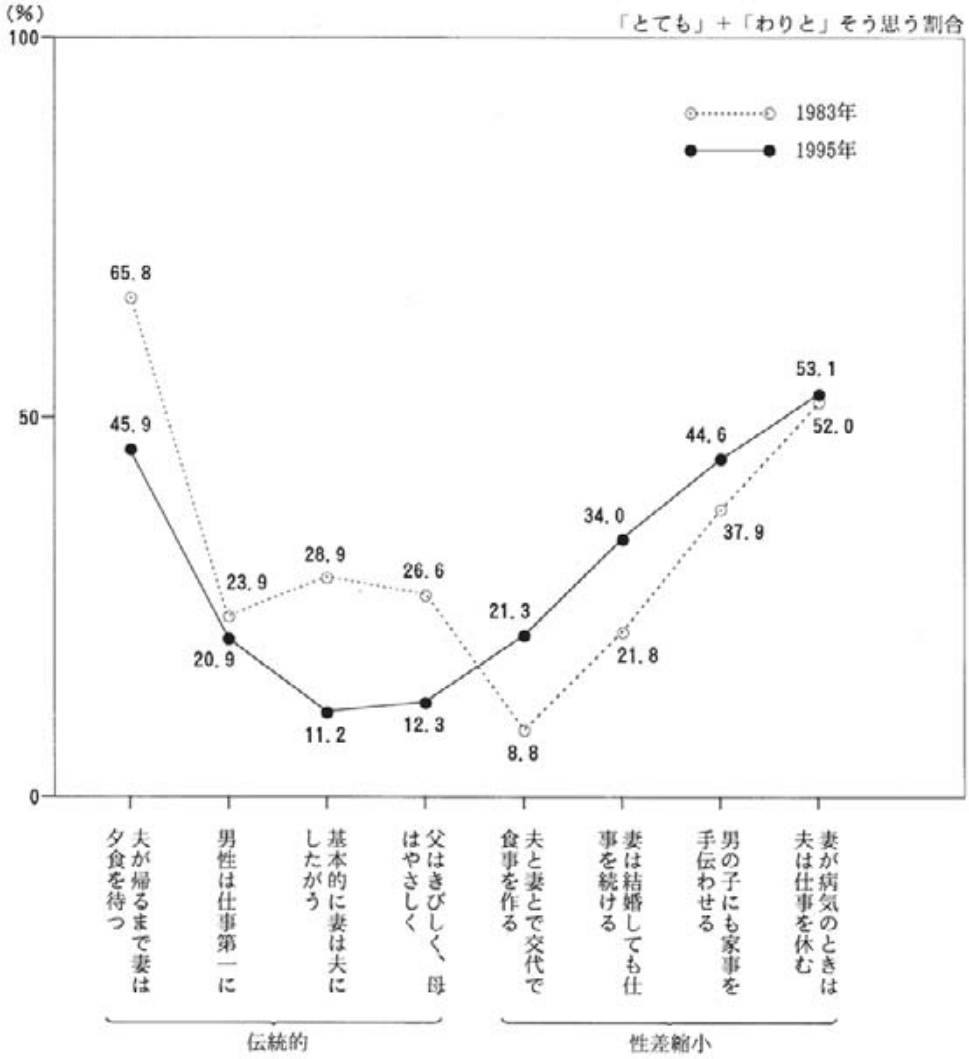
「ぜひ」＋「ときどき」手伝ってあげたい（もらいたい）割合

2．女性の役割について

そこで、もう少し一般化した形で、男性と女性の性的な役割分化についての考え方を尋ねてみた。

図７（表19）から明らかなように、1983年の場合、中学生の65.8%が「夫が帰るまで妻は夕食を待つ」のが望ましいと考えていた。

図７　性的役割について



しかし1995年になると、そう思う生徒は19.9%減少して45.9%にとどまった。それと同じように、「基本的に妻は夫にしたがう」の生き方を支持する割合も1983年の28.9%から11.2%へと、半数以下に減少している。そして、「夫と妻とで交代で食事を作る」を支持する生徒は8.8%から21.3%へと倍増している。

表19　女性の役割――性差の縮小

（%）

			そう思う			半分半分	そう思わない	
			とても	わりと	小計		あまり	全然
伝統的	夫が帰るまで妻は夕食を待つ	83年	26.7	39.1	65.8	23.9	8.3	2.0
		95年	15.9	30.0	45.9	30.1	16.3	7.7
	男性は仕事第一に	83年	7.6	16.3	23.9	34.0	33.9	8.2
		95年	7.2	13.7	20.9	29.5	34.7	14.9
	基本的に妻は夫にしたがう	83年	6.2	22.7	28.9	37.5	25.8	7.8
		95年	2.3	8.9	11.2	31.7	36.1	21.0
	父はきびしく、母はやさしく	83年	8.6	18.0	26.6	38.0	25.7	9.7
		95年	3.5	8.8	12.3	30.1	37.1	20.5
性差縮小	夫と妻とで交代で食事を作る	83年	3.6	5.2	8.8	25.2	43.1	22.9
		95年	7.4	13.9	21.3	37.9	31.5	9.3
	妻は結婚しても仕事を続ける	83年	7.8	14.0	21.8	44.9	23.4	9.9
		95年	12.9	21.1	34.0	43.0	15.9	7.1
	男の子にも家事を手伝わせる	83年	13.6	24.3	37.9	40.3	17.3	4.5
		95年	16.9	27.7	44.6	39.1	12.4	3.9
	妻が病気のときは夫は仕事を休む	83年	22.4	29.6	52.0	32.0	13.3	2.7
		95年	27.1	26.0	53.1	28.2	14.6	4.1

表20によれば、男女の差の少ない家庭を作りたいという気持ちは、女子だけでなく男子もそう考えているのがわかる。したがって、これから先、こういう世代が家庭を作るようになれば、日本の家庭の姿も大きく変わってくるように考えられる。

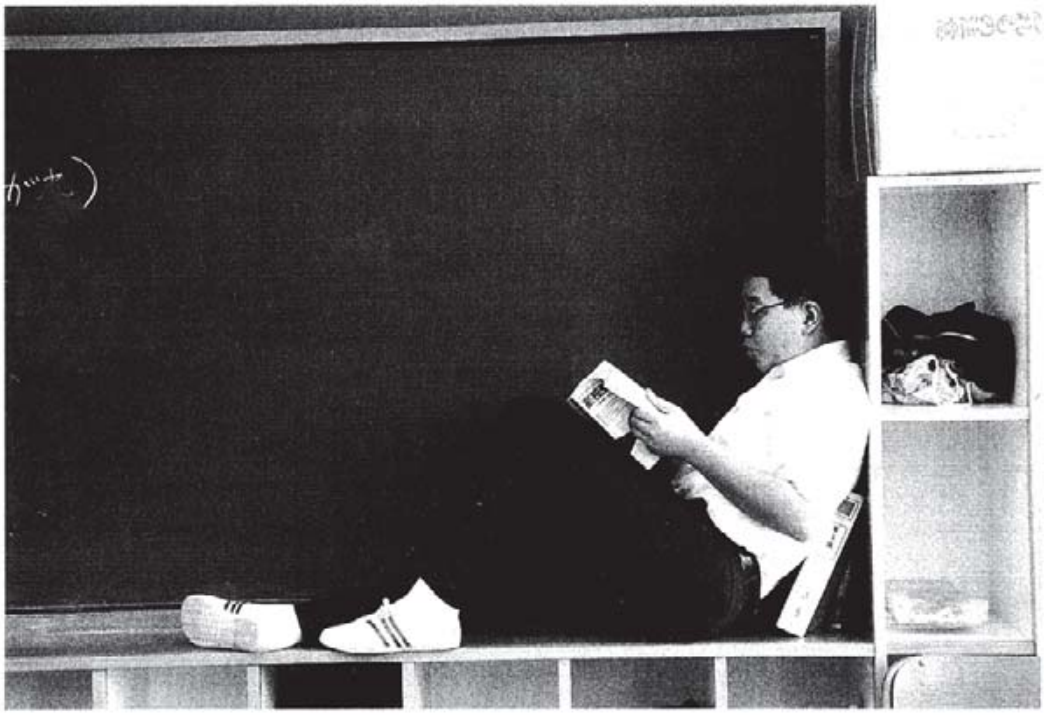
表20　女性の役割 × 属性——女子に性差縮小

(%)

		中1	中2	中3	男子	女子
夫が帰るまで妻は夕食を待つ	83年	63.0	67.5	62.5	53.2	77.6
	95年	51.2	44.3	43.2	33.1	57.7
男性は仕事第一に	83年	27.2	23.8	19.4	29.6	18.8
	95年	24.8	21.6	16.9	27.5	14.4
基本的に妻は夫にしたがう	83年	34.9	27.7	25.7	29.8	28.3
	95年	13.5	11.2	9.2	12.7	9.8
父はきびしく、母はやさしく	83年	24.7	26.5	29.5	29.1	24.5
	95年	12.3	16.2	8.7	14.6	10.2
夫と妻とで交代で食事を作る	83年	10.3	7.4	12.3	9.5	7.7
	95年	22.1	19.4	22.6	19.0	23.6
妻は結婚しても仕事を続ける	83年	20.0	19.9	31.9	16.6	26.5
	95年	33.2	30.8	37.4	27.7	39.6
男の子にも家事を手伝わせる	83年	38.3	36.5	43.8	36.6	39.0
	95年	41.2	44.1	46.3	40.0	48.2
妻が病気のときは夫は仕事を休む	83年	54.7	51.5	50.7	66.2	39.2
	95年	57.0	51.9	50.8	67.5	39.2

「とても」＋「わりと」そう思う割合

第6章 社会的な達成をめぐって



1．将来への見通し

中学生はこれから成人して人生を送る人たちである。それだけに、中学生が将来にどういう見通しを抱いているのかが気にかかる。

表21に示したように、「望み通りの高校に入れる」から「老後、幸せに暮らせる」まで全体として、「きっと」「かなり」できると将来に明るい見通しを抱く中学生は少数にとどまっている。

そうした中で、1983年と比較して、1995年の結果はそれほど大きな開きは認められない。その中で、「望み通りの高校に入れる」が1983年の「きっと」「かなり」を合わせて17.6%から34.7%へほぼ倍増しているのに対し、「仕事の面で活躍する」は32.3%から24.3%へと減少しているのが目につく。

このように社会的な達成の低さが顕著なので、「テレビによく出る一流歌手」や「日本を代表する大学教授」などの大きな社会的な目標を示して、それにつけそうかを尋ねてみた。

表21　将来の人生――幸せな家庭

（%）

		できる				無理		
		きっと	かなり	小計	やや	やや	かなり	とても
望み通りの高校に入れる	83年	9.5	8.1	17.6	37.9	25.1	12.6	6.8
	95年	23.5	11.2	34.7	34.3	20.9	5.8	4.3
望み通りの大学に入れる	83年	7.1	5.4	12.5	26.1	28.3	16.6	16.5
	95年	9.9	6.4	16.3	30.5	27.2	12.4	13.6
望み通りの仕事につける	83年	11.5	10.2	21.7	39.9	22.8	9.8	5.8
	95年	15.1	10.4	25.5	41.2	23.2	6.2	3.9
理想の人と結婚できる	83年	20.2	7.6	27.8	24.2	20.8	11.1	16.1
	95年	18.6	8.8	27.4	29.4	26.5	8.7	8.0
幸せな家庭生活を送れる	83年	22.9	14.3	37.2	35.8	12.3	6.1	8.6
	95年	24.6	14.6	39.2	37.2	14.7	4.1	4.8
仕事の面で活躍する	83年	15.1	17.2	32.3	43.6	15.7	4.2	4.2
	95年	14.9	9.4	24.3	34.8	28.2	7.9	4.8
有名になれる	83年	6.3	2.8	9.1	10.4	31.8	21.4	27.3
	95年	11.4	4.2	15.6	13.3	35.0	17.0	19.1
お金持ちになれる	83年	7.0	3.3	10.3	19.1	35.0	14.6	21.0
	95年	11.6	4.8	16.4	19.0	31.4	16.2	17.0
社会的に尊敬される	83年	4.9	3.1	8.0	16.9	35.8	17.8	21.5
	95年	9.1	3.7	12.8	14.9	33.7	18.5	20.1
老後、幸せに暮らせる	83年	24.3	15.1	39.4	37.0	12.7	3.6	7.3
	95年	28.5	13.2	41.7	35.0	13.8	4.6	4.9

表22から明らかなように、大きな社会的目標に到達するのは困難だと、達成を断念している生徒が多い。そして、1983年と1995年との比較では、**図8**のプロフィールから明らかなように、全体として、1995年の方が「なれる」と思う割合が低下している。なお、属性別の結果では、達成を断念しているのが学年や性別を超えて共通しているのがわかる（**表23**）。

表22　社会的な達成――なれそうもない

(%)

		なれる			無理	
		たぶん	もしかしたら	小計	かなり	とても
テレビによく出る一流歌手	83年	9.0	24.7	33.7	29.3	37.0
	95年	8.8	16.6	25.4	30.3	44.3
大会社の社長	83年	8.6	18.3	26.9	31.5	41.6
	95年	10.7	16.8	27.5	26.7	45.8
プロスポーツの一流選手	83年	8.9	24.7	33.6	28.3	38.1
	95年	9.3	17.4	26.7	25.4	47.9
難病の治療で知られる名医	83年	5.2	16.5	21.7	33.3	45.0
	95年	4.6	12.4	17.0	29.8	53.2
日本を代表する芸術家	83年	4.9	16.6	21.5	33.7	44.8
	95年	5.4	10.0	15.4	28.3	56.3
国会議員などの政治家	83年	5.3	20.0	25.3	28.2	46.5
	95年	5.8	12.1	17.9	25.2	56.9
日本を代表する大学教授	83年	4.7	9.9	14.6	30.8	54.6
	95年	4.9	7.1	12.0	26.5	61.5

図８　達成できると思う割合

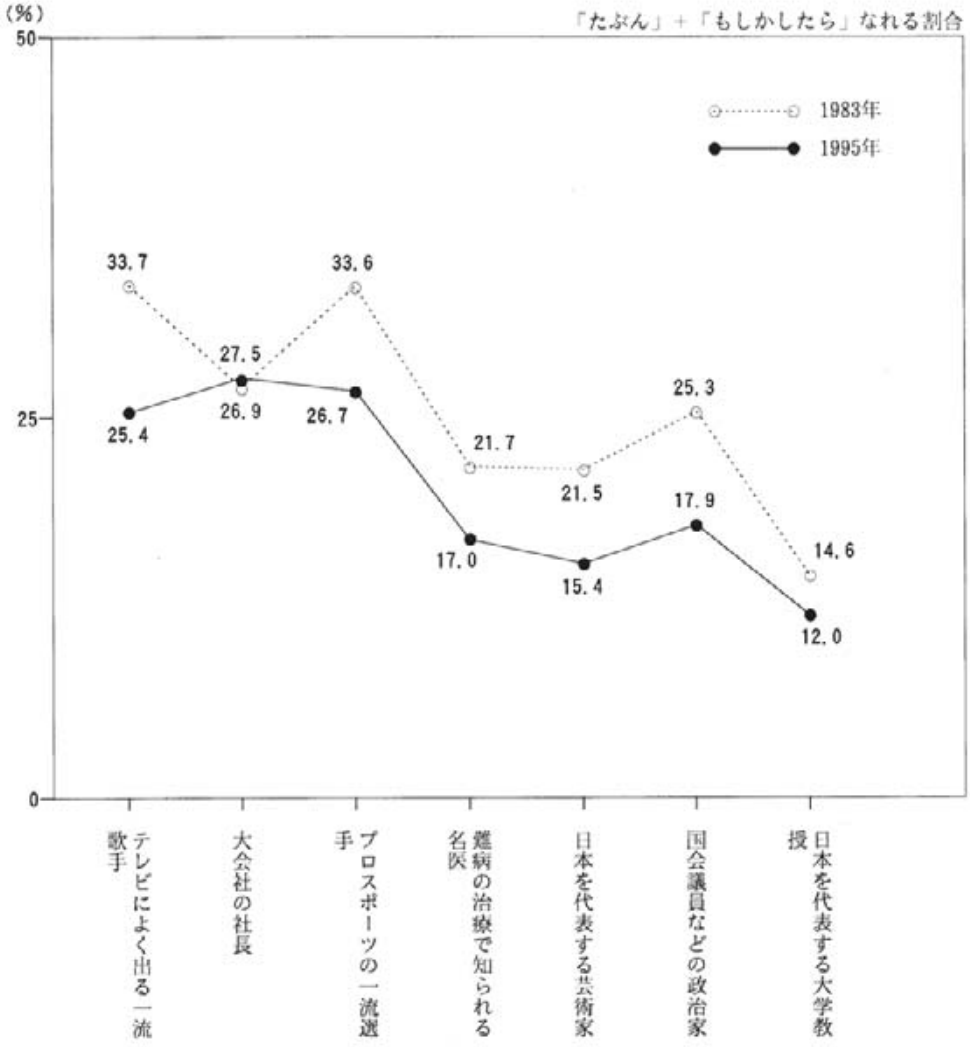


表23　社会的な達成 × 属性――全体に低下

(%)

		中1	中2	中3	男子	女子
テレビによく出る一流歌手	83年	36.1	31.0	34.0	28.6	38.8
	95年	26.2	23.4	26.0	23.3	26.9
大会社の社長	83年	25.0	28.0	27.5	36.6	16.5
	95年	27.2	25.7	29.4	36.6	18.9
プロスポーツの一流選手	83年	37.4	33.6	30.0	43.1	23.4
	95年	30.4	25.6	24.6	36.7	17.2
難病の治療で知られる名医	83年	22.6	23.6	19.1	23.3	20.0
	95年	17.3	16.0	17.7	20.4	13.7
日本を代表する芸術家	83年	20.5	23.7	20.4	23.3	19.6
	95年	15.2	14.2	16.8	17.0	13.9
国会議員などの政治家	83年	26.2	25.9	23.8	31.8	18.3
	95年	16.4	17.4	19.7	24.0	12.0
日本を代表する大学教授	83年	13.4	16.6	14.1	18.5	10.6
	95年	10.8	10.9	14.1	16.5	7.7

「たぶん」＋「もしかしたら」なれる割合

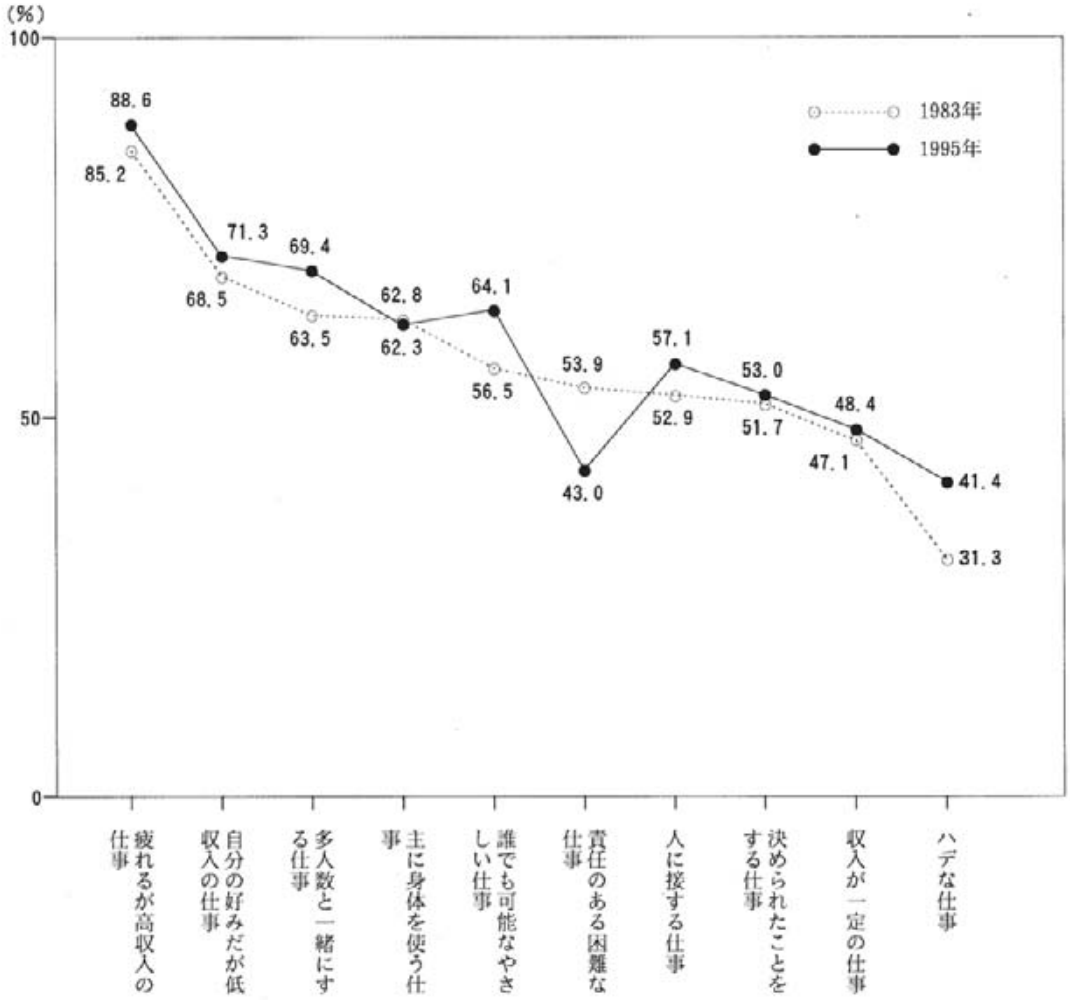
2．将来の仕事

このように考察してくると、1983年から1995年へ変化してくるにつれて、中学生は社会的な達成を断念して家庭志向を強めているような印象を受ける。

そこで、「疲れるが高収入の仕事」と「楽だが低収入の仕事」、あるいは、「自分の好みだが低収入の仕事」と「自分の好みでないが高収入の仕事」のように、対の項目を10個示して、どちらの仕事を望むかを尋ねてみた。

結果は図9（表24）に示したが、この中で1983年と1995年との開きに注目してみよう。1983年と比較して、1995年の数値が開いた項目を示すと以下のようになる。

図9　つきたい仕事



	83年	95年	(差95年−83年)
①責任のある仕事	53.9%	43.0%	−10.9%
②ハデな仕事	31.3%	41.4%	10.1%
③誰でも可能な仕事	56.5%	64.1%	7.6%
④人と一緒にする仕事	63.5%	69.4%	5.9%
⑤人に接する仕事	52.9%	57.1%	4.2%

このように分析してみると、中学生が望んでいるのが、「①責任のある仕事を避けて、②ハデで、③誰でもできる、④人と一緒にする、⑤人に接する仕事」であることがわかる。責任を持ちたくないが、人と一緒に少しハデな仕事を楽しくしてみたいというのであろう。

表24　将来の仕事——人と一緒に楽しい仕事

(%)

A		全体	学年			性		B
			中1	中2	中3	男子	女子	
疲れるが高収入の仕事	83年	85.2	85.6	82.8	87.1	86.9	83.4	楽だが低収入の仕事
	95年	88.6	90.0	88.3	87.4	89.3	87.8	
多人数と一緒にする仕事	83年	63.5	65.9	65.2	60.2	60.9	66.7	1人、または少人数でする仕事
	95年	69.4	74.4	67.9	66.6	69.8	69.0	
自分の好みだが低収入の仕事	83年	68.5	64.6	68.4	72.2	64.1	73.4	自分の好みでないが高収入の仕事
	95年	71.3	63.9	73.1	75.5	67.2	75.3	
誰でも可能なやさしい仕事	83年	56.5	57.3	55.3	56.8	47.8	65.9	知識が必要な困難な仕事
	95年	64.1	67.3	65.1	60.6	58.9	69.2	
主に身体を使う仕事	83年	62.8	64.1	64.6	60.5	61.5	64.6	主に頭を使う仕事
	95年	62.3	67.1	61.2	59.4	62.0	62.6	
人に接する仕事	83年	52.9	54.8	56.6	48.2	44.4	61.9	物をとりあつかう仕事
	95年	57.1	57.6	53.4	60.3	50.0	63.9	
決められたことをする仕事	83年	51.7	47.9	50.7	55.8	47.6	56.0	自分で工夫する仕事
	95年	53.0	56.1	51.8	51.6	51.3	54.6	
収入が一定の仕事	83年	47.1	42.9	46.2	51.5	42.2	52.5	能率給の仕事
	95年	48.4	43.8	52.3	48.6	41.0	55.4	
ハデな仕事	83年	31.3	31.3	31.3	31.1	27.9	34.9	地味な仕事
	95年	41.4	49.0	38.1	38.7	40.1	42.8	
責任のある困難な仕事	83年	53.9	55.5	52.6	53.6	59.9	47.4	無責任なやさしい仕事
	95年	43.0	38.7	41.3	47.9	46.7	39.5	

AとBのうち、Aと答えた割合

第7章 まとめに代えて

10年の歳月が過ぎていくうちに中学生はどう変わったのか。それを考えようとしたのが本号の目的であった。調査を開始したとき、10年では中学生が変わっていないのではと心配した。

結果を見ると、中学生が変わっているのは確かだった。そうした変化を要約してみると①気にかける友だちの数が減り、心理的な空間が狭くなった。②善悪についての規範感覚が崩れ、悪いと思うことが減少している。③将来の家庭では夫と妻とで家事育児を担おうという傾向が強まる。④社会的な達成を断念して、責任のない楽しい仕事をしようという気持ちが強い、の通りとなる。

おおづかみにすると、自分の世界の中で楽しく暮らしたいという気持ちが表面にでている。日本のかつての社会で支配的であった社会的な達成が何よりも大事、社会のために滅私奉公という生き方にも疑問がある。かといって、社会的な達成を視野の外にして、家庭を中心にマイペースの生き方をしたいというのは可能なのであろうか。

アメリカやカナダを訪ね、広大で肥沃な土地を見ていると、無理に都会に出て人混みに揉まれて暮らすより、自然の中で親しい人たちとのんびり人生を送れたらよいのにと思う。

そう考えてくると、中学生たちの描くマイペースの人生設計はわからなくもない。しかし日本のように、狭くて資源もない土地にたくさんの人の住む社会では、人々のやる気だけが頼りになる。

実際に、エコノミック・アニマルといわれようと、そうした人々のやる気が日本の経済的な繁栄をもたらしたのであろう。ところがやる気世代の末裔たちは親世代の勝ち得た繁栄を当然のことのように感じて、マイペースの生き方を望んでいる。

マイペースを望むのはよい。しかし、望むのなら実現の可能性を確かめるべきであろう。一人一人がしっかりとした個性を持ち、自分の生き方を貫いていく。そうしたマイペースなら希望が持てる。しかし、現実の中学生は

家庭の中で親に頼り、依存したままの生活を送っている。これでは、昔からいわれてきた「総領の甚六」や「売り家と唐様で書く3代目」が大量に発生したのであって、日本の将来が心配になる。

中学生たちに社会へ目を向けさせ、意欲的に生きていかせるためにどうしたらよいのか。中学生に教えこむのでなく、中学生の自主性を育てるシステムの開発が必要のように思われてくる。